

2026年6月9日
琉球大学 山口剛史

玉城村の人々は戦争にどう関わったのか

3年 組 番
名前

はじめまして。琉球大学教育学部で社会科を教えています山口剛史（やまぐちたけし）と申します。みなさんは、ひめゆり平和祈念資料館を見学したり、修学旅行で長崎に訪れたりと平和について学んでいますね。ぜひ、それらの学習を通じて、「平和のつくり方」を中学生3年生なりに見つけてほしいと思います。現在も戦争が各地で続いています。どうやったら戦争をやめさせる、させないことができるのかを、沖縄戦の歴史からそのヒントを見つけてください。今日は、みなさんの住んでいる玉城の人々が沖縄戦にどう関わったのかを見ていきましょう。

【玉城の沖縄戦クイズ】

第1問：旧玉城村内で一般住民の戦没者が多い集落ベスト3はどこでしょう？地図に○をつけましょう。



予想した理由

第2問：玉城の人々はどのような形で戦争に協力したと思いますか。仕事（作業）内容を思いっただけ挙げてみましょう。

第3問：上記の仕事は、誰が命令したと思いますか？

- ①日本軍 ②玉城村役場の人・村長 ③字の区長 ④自主的に参加した ⑤その他

【確かめてみましょう】

資料 1「玉城村出身者の沖縄県内で亡くなった人々」を確認しましょう。

一般住民の戦没者が多い集落 1 位（ ）
2 位（ ）
3 位（ ）

その理由は

資料 2 を確認しましょう。玉城の人々は、さまざまな形で戦争に参加しました。軍人、軍属（ぐんぞく）、防衛隊（ぼうえいたい）、義勇隊（ぎゆうたい）という言葉で、分けています。

軍 人…いわゆる兵隊のことです。召集令状（しょうしゅうれいじょう）によって、正式な軍隊の一員として兵士になります。20 歳（1943 年からは 19 歳）になると、兵役を義務として男子が兵士となりました。沖縄戦にも沖縄出身の兵士がおり玉城出身の兵士がいました。

軍 属…兵隊以外の軍隊から給与をもらって軍の手伝いをする人のこと。男女問わずさまざまな仕事がある。沖縄戦では、民間人で軍に協力した人々を軍属と読んでいます。

防衛隊…防衛招集という軍隊の手続きで入った陸海軍の兵隊の人たちのことです。戦闘部隊の補助や飛行場を建設などから直接戦闘に参加する人も多くいました。

義勇隊…アメリカ軍の上陸が間近となった昭和 20 年 2 月市町村ごとに戦争に協力するためにつくられた部隊です。集落ごとにつくられたところもあります。沖縄戦では、一般の男女が参加しました。弾薬や食糧を運んだり、戦闘に参加したりしました。

※ 学校の生徒が戦争に参加する時には、**学徒隊（がくとたい）**として参加しました。ひめゆり学徒隊はその例となります。

（参考：南城市の沖縄戦 証言編 軍事用語解説・用語集より）

玉城村で軍隊の一員・手伝いとして参加した人は以下ようになります。沖縄戦に軍隊の一員として参加した方は、1069 人となり、玉城村にいた方の 14.7%が軍隊に動員されました。

	県内で沖縄戦に参加	亡くなった方	戦没率
軍人・軍属	328 人	257 人	78.4%
防衛隊・義勇隊	741 人	362 人	48.9%

一般住民は、沖縄県内にいた 6169 人のうち、1383 人が亡くなりました。戦没率は 22.4%です。住民全体の戦没率は、25.2%ですので玉城村の 4 人に 1 人は戦争で亡くなったことになります。

【読んでみよう：玉城の人々はどのように戦争に参加したのか】

ここからは、南城市がまとめた「南城市の沖縄戦 資料編」にある資料から、住民がどのように戦争に参加したのかを見てみましょう。資料は、「第十七号第二種『軍属に関する書類綴』」というものです。戦後、軍隊にどう協力したのかを調べた資料です。

資料を読み、誰が、どんな仕事についたのか、命令したのは誰かわかるところに線を引きましょう。

美田部隊軍属資料（一部抜粋）

一般義勇隊

3月20日頃、美田部隊は村長に対し、次の如き事項を要請した。

「16才より60才までの男子は非常に際し部隊に協力する為め現住所を離れないようにして貰い度い」
区長を通じ右のように各戸に通達せられた。

数日後から之等の人々は義勇隊の名目で集団的に徴用が開始せられた。之が引渡しは各部落区長は指定場所まで引率して行って引渡したのもあるが部隊から派遣されて来た兵隊に引率されて行ったのもある。

美田部隊 救護班

二月初旬頃より駐屯地内女子青年団を対象に各部落毎2及至8名の幹部級団員を部落区長推薦により村役場内農業会事務所内に於て一週間救護員教育を施す。（中略）

入隊は最初の一月二〇日のとき34名位は黄色い紙によって本部に集合入隊した。第2回目以後の入隊は村長を経て区長を通して口頭伝達か又は直接区長を通して軍からの命令により入隊した。

炊事婦

二月中旬頃から部落区長を通じて①未婚の女子、②出役しても家庭的支障のない事情にある女子に対し員数割当を以て徴用最寄りの部隊に入隊せしめた。

三月二十三日以前は家庭からの通勤（交代制なし）であったがその後は部隊住込みとなった。

（出典：南城市の沖縄戦 資料編 483頁-484頁）

年齢も性別もさまざまな人が沖縄戦において軍隊の一員として戦争に参加しました。その時の様子について「玉城村史 第6巻戦時記録編」に掲載された体験者の証言を見てみましょう。

【中村康雄さん（当時15歳 前川）の話】

私は3月11日に義勇隊として徴用された。区長からの文書によるものだ。いよいよ軍隊と共に行動することになる。配置されたのは、前川駐屯の球部隊。西村大隊の第8中隊（竹中中隊）だった。同級生で前川出身の大城俊一、与儀喜誠、仲村渠辰一、仲村渠秀雄君の4人も同じ中隊だ。他に第六、第七、第九中隊に配属された同級生や先輩含めて30人くらいだった。この中で生き残ったのは10人だ。

【安座間正喜さん（当時 16 歳 愛地）の話】

アメリカ軍の上陸後一か月ほどすると、玉城村に駐屯していた球部隊は第一線地の松川・安里方面へ移動しました。球部隊の移動に伴って、愛地と船越の 20 人ほどの男の人がヤンバル山（村中央公民館裏）から松川・安里まで弾運びをさせられました。弾運びの動員は区長を通して行われたが、高等科二年生であった私も体が大きかったことから選ばれ、大人と一緒に弾運びに駆りだされました。

【中村有彦さん（当時 15 歳 奥武）の話】

私は昭和 20 年 3 月中旬頃、軍の命令により玉城村青年学校の青年団員 60 人とともに球部隊西村大隊の第 7 中隊（高橋中隊長）の下に 20 人配属された。日常の任務は陣地構築や小銃の撃ち方、手りゅう弾のピンの抜き方、投げ方、米軍戦車隊に対する梱包爆薬の仕掛け方や米兵を仮定したワラ人形への銃剣術の訓練等、実践を想定したものでした。

【大城富美さん（当時 16 歳 奥武）の話】

役場より救護班への徴用命令がきましたので、配属されてからは中隊の衛生兵の指導で負傷者の取扱いや、治療のやり方など応急処置法の訓練を受けました。そして、夜になると 1～2 時間は壕入口で竹槍を持ち門番をやらされました。（中略）救護班は、各中隊に 2 人ずつ配属され、大道の中隊には、私と大城ツルさんの 2 人が配属されました。そこには、炊事の同郷出身の嶺井ヨシさん、大城ヨシ江さんの 2 人が居りました。大道壕での食事は、主として缶詰類で一日 1 食～2 食程度で、寝床はゴザや茅を敷きつめた厳しいものでありました。

わかったことを下の表にまとめてみましょう。

誰が	どんな仕事を	誰に命令されて

【読んでみましょう：石嶺さんはどんな気持ちで沖縄戦に戦っていたか】

ここでは、実際に防衛隊として参加した石嶺眞良さん（当時 29 歳）の方がどんな気持ちで戦場にいたのかを読んでみましょう。石嶺さんの気持ちがわかるところに線を引きながら読みましょう。

新原から 5 人防衛隊へ

私は未だ本家住まいで家族は長兄夫婦と、その子供四人、それに私夫婦と子供三人、そして二男と妹の 13 人家族だった。長兄は、19 年度の百名二区（新原）の区長をしていた。その頃、百名二区にも軍隊が駐屯し、区長の任務も軍隊の壕掘り作業の動員計画や食糧物資の供出計画等で忙しかった。8 月、米軍の上陸が濃厚となった頃、子供は長兄の妻や子供たちと一緒に熊本県に疎開させることにした。

私は当時 29 歳の働き盛りで、荷馬車運搬業（バシャムチャー）をしていた。主に村内や具志頭村、東風平村一帯の道路工事等の資材運搬で、製糖期に入ると黒糖を那覇へ運搬する仕事をしていた。しかし、昭和 20 年 2 月中旬、私にも防衛隊の招集令状がきた。馬車共に志堅原の仁川付近に駐屯する曙部隊挺進基地第二中隊へ配属された。同郷出身の屋比久孟盛、眞栄城守徳、島袋昌幸、島袋昌永等も一緒であった。

其処での毎日の仕事は特攻艇を隠すための壕掘りと、壕に使用するために船越や富里の山から切り出され、二米から三米位に切断した松の杵材を荷馬車で運搬する業務が主だったが、海岸から号内への船艇の海水路掘り作業も連日連夜続き、牛馬のように働いた。又、冬の寒風の中、海中に潜り奥武のナジナタ浜の浚渫（土砂をさらう）作業は大変重労働であった。

志堅原仁川からの移動

昭和 20 年 3 月 24 日の早朝、港川から知念沖まで米軍の艦隊が黒山のごとく集結し、午前 8 時頃から史上初めての艦砲射撃が始まった。それと同時に航空母艦からはグラマン戦闘機が 4 機編隊で何百組と飛来し、爆撃も加わった。私たちは壕の中から一方的な米軍の攻撃の様子を窺うのみであった。その日の爆撃で私達が日頃の作業で出撃命令に備えてあった特攻艇も 80%以上が爆破されてしまった。此の様な状況が三 1 四日続いたと思うが、三月二十六日に米軍が慶良間島に上陸した頃、私達の部隊に志堅原からの移動命令が出された。やっとの思いでたどり着いた時には、私達の小隊からも初めて若干名の戦死者が出て非常に悔しく残念に思った。

メガネ橋付近での米軍の猛攻撃

その後、豊見城村高安のメガネ橋近くの壕に移動した四月末の夜、私達の小隊が特攻艇の出撃準備をしている最中に付近一帯迫撃砲の集中攻撃を受けた。共に行動して来た同郷の島袋昌幸が直撃を受けて即

死、胴体も吹き飛ばされ顔形も分からなくなってしまった。その時、十数人の兵隊と防衛隊員が戦死した。その頃からはもう同僚を失っても、人間の死に対する感覚も麻痺し何の悲しみもなく、明日は我身かと思うばかりで、ただ、米軍に勝つとの一念のみであった。

特攻艇に替わるサバニ探し

米軍の猛攻撃で特攻艇が爆破され、体当たり戦術が不可能になった 5 月下旬、特攻艇の替わりに沖縄のサバニを使用するとの指令が出され、私達に南部の新垣集落に移動せよとの命令が出された。一夜で目的地の新垣に着き昼は山陰に隠れ、夜になると喜屋武岬浜辺でのサバニ探しが私達の任務としかしサバニは見つけることが出来なかった。私達の小隊は場所を変更し、二日後に具志頭村坡名城まで撤退することになった。私達は岩陰に石垣を積み、茅で掩って其処で日本兵二人も一緒に一時をしのいだ。彼等は食糧を持っていた。食事を作れと命じられたが水がない。仕方なく周囲を見渡すと濁った水溜りが見付かったので、その水でご飯を炊き、久しぶりに飯を食べた。

「斬り込みに行け」と命令され

食後、我に返って周囲を見まわすと、3 月 26 日に志堅原陣地から小隊長をはじめ兵隊と防衛隊、総勢 40 人で移動を共にした隊員は既に離散し、生き残ったのはたったの 5 人となっていた。

暫く沈黙が続いていたが、やがて一人の兵隊から三本の火薬に導火線を取り付けた棒状円形の手榴弾のような物を渡され、君は「敵陣に斬り込みに行け」と命令された。とっさのことで私は「ハイ」と答えたが、しかし、こんな簡単な武器では米軍への斬り込みは出来ない。死んで来い、と言われたようなもので、全然斬り込みに行く気はなかった

どうせ死ぬなら新原で

丁度その時、どうして知ったのか分からないが、妹（ヒデ）と玉城ユキ、高嶺シゲ（三人とも新原出身の娘達）が面会にやって来た。その時、私は態度を決めた。この場を早く逃れないといけないと思い、立ち上がった。どうせ死ぬなら生まれ故郷で死のうと思い、兵隊には斬り込みに行きますと言って最後の別れを告げ、娘達も誘い出し、新原を目指すことにした。

（玉城村史 第 6 巻戦時記録編 379-381 頁 一部改変）

石嶺さんの気持ちに線を引いて、あなたが疑問に思ったことを書きましょう。

今日の授業を受けて疑問に思ったこと、調べてみたいと思ったこと

3 年 組 番 名前